

週一単位の総合的な学習の時間で外国籍生徒が日常生活に不自由しない日本語運用能力を身につけるための方策についての研究

キーワード 外国籍生徒、日本語指導、JSL

学校名 岐阜県立加茂高等学校定時制

所在地 〒505-0027
岐阜県美濃加茂市本郷町2-6-78

ホームページ
アドレス <http://school.gifu-net.ed.jp/kamo-hs/teiji/>

1. 研究の背景

本校に在籍する外国籍生徒数がこの数年で急激に増加し、現在では在籍生徒の過半数を超えた。彼らの日本語運用能力は総じて低いため、外国人適応指導員による翻訳プリント等の母国語支援を付けないと授業が理解できない生徒もいる。本校での授業内容は中学校での学びのリメディアルからスタートする。彼らにとって外国語である日本語で授業内容を理解することは困難である。そのような背景から彼らの理解度を高めるために、視覚的に理解しやすい ICT 機器を活用した授業の必要性も高く、昨年度より学校全体でプロジェクターと ICT 機器を活用した授業を試みた。

外国籍生徒の多くが高校卒業後、正社員として就職を希望している。そのためには日本語運用能力を高める必要がある。上記のように外国籍生徒が理解しやすい授業を展開することは必要である。しかしそれだけでは彼らの進路を実現するには不十分である。彼らが就職する際に求められるレベルの日本語を習得させるためには、外国語として日本語を習得させるスキルが必要であるが、本校には日本語指導を専門的に指導できる職員がいない。各職員が授業の中で試行錯誤を繰り返しながら指導をしているが、行き詰まりを感じている。また、1日に4コマしか授業を実施することができない上、多くの生徒が始業前や放課後の時間外補習を受けることが難しい。

2. 研究の目的

上記のような制限が多い状況の中で、本研究では自由な活動を仕組むことができる総合的な学習の時間（週一単位）を生かし「ICT 機器を活用した、生徒の日本語運用能力を高める指導」の研究を開始することにした。

3. 研究の経過

東京学芸大学齋藤ひろみ教授から教科指導を通じた日本語指導と本研究全般についてアドバイスをいただいた。主な活動は2つに絞り込むことになった。本研究の幹である日本語ワークショップについては、可児市国際交流協会事務局長各務真弓様、山田久子様、菰田さよ様にご助力いただき、外国籍生徒の希望者を対象に4月25日から2月2日の間、おおよそ月1回のペースで全11回実施した。全校生徒には校内プレゼンテーション大会を企画した。当初、日本語ワークショップ

で外国籍生徒単独でプレゼンテーションを指導・実施するのは非常に困難であろうという予想から、6～11月の総合学習5回分を配当し、日本人生徒・外国籍生徒合同グループをつくり、クラス単位でプレゼンテーションに取り組みさせた。11月28日にクラス予選を実施、その結果を受け12月14日にクラス対抗の決勝戦を実施した。

実施日程

月	日本語ワークショップ	校内プレゼンテーション大会
4月	4月5日 関係者合同打ち合わせ 4月25日 第1回目日本語ワークショップ (グループエンカウンター①、 Non-verbal コミュニケーション活動)	
5月	5月30日 第2回目日本語ワークショップ (グループエンカウンター②、グループ作り)	
6月	6月20日 第3回目日本語ワークショップ	6月27日 第1回目 (キックオフ会)
7月	7月11日 第4回目日本語ワークショップ (「屋久島についての紹介文」を使ってプレゼン テーションの文章を作り、発表を行った。) 同日第1回日本語指導研究会を実施。	7月7日 第2回目 (グループ決め、 プレゼン内容の話合い・夏季休業中の計画) *これに合わせて夏季休業期間中に各教員1人 1カ所を取り上げてスライドを作成し9月か ら週例の打合せ会をでプレゼン研修を実施。
9月	9月15日 第5回目日本語ワークショップ (発表グループ決め、テーマ設定話し合い)	9月12日 第3回目 (原稿・スライド作 成開始・チェック)
11月	9月19日 第6回目日本語ワークショップ (発表テーマ決定、準備開始) 11月10日 第7回目日本語ワークショップ (発表原稿チェック、修正)	11月17日 第4回目 (原稿・スライド 最終チェック、リハーサル)
1月	11月21日 第8回目日本語ワークショップ (発表原稿チェック、スライド作成開始)	11月28日 第5回目 (クラス予選)
2月	1月23日 第9回目日本語ワークショップ (発表練習①、スライドチェック)	12月14日 校内プレゼンテーション 大会決勝 (美濃加茂市東図書館大ホール)
	1月30日 第10回目日本語ワークショップ (リハーサル)	
	2月2日 第11回目日本語ワークショップ (全体発表)	

4. 代表的な実践

(1) 日本語指導研究会

本研究の計画に対して、そして、本校職員の日々の授業実践についてアドバイスをいただきたく思い、外国籍生徒への日本語指導の第一人者である東京学芸大学教育学部日本語教育分野教授齋藤ひろみ先生に來岐いただきご指導いただいたことに感謝を申し上げたい。

7月11日、本校にて第1回日本語指導研究会及び授業研究会を実施した。始業前の時間を使い、齋藤教授より「Content-based(内容重視)の日本語教育・教科と日本語の統合学習」と題し、教科を通じた日本語を指導する要諦について本校教員・地域の指導者を対象に、2時間講義していただいた。この研究会には、外国籍生徒をこれから迎え入れようとして計画している近隣の岐阜県立国際たくみアカデミー職員、そして本研究をサポートしていただいた可児市国際交流協会の職員の方々も参加した。どの機関においても「外国籍生徒をどのように受け入れ、今後、どのように日本語による学びをサポートしていけばいいのか？」という共通課題を抱えている。どう指導していけばよいか即効性のある解決策はないが、このような会を通じて、関係機関同士が連携できた。

7月11日 日本語指導研究会



東京学芸大学齋藤ひろみ先生による講義
「Content-based内容重視の日本語教育
教科と日本語の統合学習
(横断型カリキュラム)」



「ペアでの話し合い」から
論点を引き出していただけながら
理解を深めることができた。



初めてのプレゼン体験。緊張の中、
原稿を読み上げるも課題山積であった。



見ていただいた授業の講評・アドバイスを
いただくことができた。

ワークショップとして取り上げていただいた題材は、我々が日頃何気なく使ってしまう「教科指導用語」であった。事前の齋藤教授との打ち合わせで、抽象度が高く、言語活動をさせにくいという認識が強かった数学を取り上げることにした。当日は「多項式の展開」の単元を取り上げ、実際の教科書を見て、そこで使われる指導用語としてどのようなものが挙げられるかについてペア形式で話し合った。その結果、「移行」、「括弧を外す」、「～を・・・と置く」といった用語や言い回しを使っているのではないかと推測した。「教科の学習を通じた日本語の習得」を念頭に置いた場合、今回の「分配法則を使った展開の計算」を扱った場合、教科の目標としては「分配法則を使って多項式を展開できる」といった設定が考えられる。一方、日本語習得の観点では『「分配する・括弧を外す」といった語彙・表現を使って数学的な日本語活用力を伸ばす。』という目標を設定することができる。

今回、抽象化された事柄を扱うことが多い数学を例に、分かりやすく教科指導を通じた日本語指導について講義いただいた。日頃、各教員が各自で試行錯誤していることの方性は間違っていないことが確認できた。齋藤教授からの暖かい指導や助言によって、各教員が自信をもって指導に当たることができるようになったのは成果であった。

(2) 日本語ワークショップ

本年度の総合的な学習の時間での学習内容を①校内漢字検定、②日本語能力検定1級・2級対策講座、③日本語ワークショップの同時3展開に変更した。どのコースを選択するか、あらかじめアンケートを取り、日頃の学習状況やこれまでの成績などをもとにクラス担任と本人で相談したうえでコース選択を実施した。結果的に、日本人や日本語が堪能な外国籍生徒の希望者が①や②を、日本語の使用に困難を感じる外国籍生徒が③を選択した。

指導者は本研究を担当した渡部、可児市国際交流協会の各務真弓氏、山田久子氏、菰田さよ氏を中心に学習活動の計画立案を行い、実施する際には講座①、②を担当しない5名の本校職員も加えた8名の指導者で指導することできめ細かい指導をすることができた。

取り組んだ活動としては大きく分けて3部構成になる。前半の2回を使ってこの日本語ワークショップの意義・目的を伝え、エンカウンター活動を通じて学ぶ集団として一体感を持たせた。

夏季休業期間に入るまでの中盤の活動として、グループによる「プレゼンテーションの発表練習」を行った。大修館書店にほんご多読ボックス vol.1 1-2「屋久島」の内容を元にパートごとに原稿を作成し、こちらで用意したスライドを使って発表をさせた。6月20日にグループ分けと原稿の作成を行い、各自で練習を

オレーターで語っていただいた。その後、「美濃加茂市のおすすめ観光ルート」をテーマに校内プレゼンテーション大会を実施することをアナウンスした。

キックオフ会后、グループ決めとテーマを設定した。

(3-2) プレゼンテーション教員研修会

地域外に居住する教員でも自信をもって指導できるよう、教員研修を企画した。各教員が夏季休業期間中を利用し、観光スポットに赴き、写真を撮影し、スライドを作成し、職員会でプレゼンテーションした。高校が所在する地域について理解を深めるとともに、各教員の発表を見てアイデアを共有することでクラスでの準備・発表内容を指導する際の参考になった。



美濃加茂市の特産である「堂上蜂屋柿」のプレゼンする本校職員

(3-3) 校内プレゼンテーション大会（クラス予選・決勝大会）

校内プレゼンテーション大会は各学年（クラス）のグループに分かれて準備を始めた。グループは多くが日本人と外国籍生徒の混成チームであった。準備配当時間は4コマで、十分な時間があつたわけではない。夏季休業期間中に現地に赴いたグループもあれば、仕事の関係で十分な時間が取れないグループはインターネットを活用するなどして、各自スライドを作り上げた。

予選はクラス内のグループ対抗戦で生徒が審査員を兼ねた。各学年、非常に接戦で惜しくも決勝に上がれず悔しががる生徒の姿も見られた。決勝には各学年で優勝した各4チームと、各学年の2位チームで最高得点だった1年生チームをスイングチームとして参加した。

決勝大会は本校近隣的美濃加茂市東図書館大ホールで実施した。審査員にはキックオフ会でプレゼンをしていただいた3名の他、美濃加茂市役所職員の皆様をお願いした。厳粛な雰囲気の中、5チームのプレゼンテーションが行われた。美濃加茂市山ノ上町の果樹園や新たな特産であるローゼル製品を取り扱っている「ヤマキマルシェ」取材した3学年日本人とブラジル人混成チームのプレゼンテーションが優勝した。現地に赴いて取材を行い、オリジナルの写真や実際に行ったからこそ分かる情報、観客を「引き込む」プレゼンテーションが評価された。

この「校内プレゼンテーション大会」の取り組みは当初は日本語ワークショップの補助的な活動という位置づけであった。しかし日本人と外国籍生徒が協力しながらプレゼンテーションを作り、練習し、発表する中で、普段の授業では見られない生徒の姿を見ることができた。同時に、「自分たちが伝えたい内容を日本語で表現する」ため積極的に発表しようとする姿がクラス予選から見られた。加えて、お互いの発表を聞いて評価するため、聞く態度も非常に良かった。このような教育的効果が見られたため、次年度ではこちらの「校内プレゼンテーション大会」を継続し、生徒が日本語を活用した活動として位置付けていくことになった。

第1回校内プレゼンテーションの取り組み



1~4年クラス内でグループに分かれて準備



各クラスで予選大会を実施。生徒間採点で順位を決定し、優勝チームが決勝に進出。

第1回校内プレゼンテーション大会決勝の様子
美濃加茂市東図書館ホールにて、美濃加茂市役所職員様、NPOひとネットみのかも様、美濃加茂ファーマーズ倶楽部様をゲスト審査員に迎え実施。



優勝チームによる優勝インタビュー

5. 研究の成果

今回の研究は当初DLA(Dialogic Language Assessment for Japanese as second language)を活用した日本語能力の伸長を計測しようと考えていた。実際に本校適応指導員にDLA研修を受けていただいてテストす

るため研修を計画した。しかし、このテストを実施・評価をするには熟練を要すること、また、一人当たりにかかりの時間がかかることが分かり、本校の生徒が始業前・放課後に学校に残ることができない実情から実施を断念せざるを得なかった。このため数値的な伸長について言及することは困難である。しかしながら、録画した第1回日本語ワークショップや7月に実施したプレゼンテーション体験と比較して、校内プレゼンテーション大会での様子や第11回日本語ワークショップでのプレゼンテーションの発表は質的な高まりやデリバリーの卓越は明らかである。このように1年間を通じて何らかの形で、口頭発表をする活動を継続したことで、彼らが日本語で表現することに対する自信を深めたとも言える。

6. 今後の課題・展望

生徒の「日本語による内容理解」についてはICT機材を用いた指導によって視覚的に理解する方策を講じることによってこの1年でずいぶん前進した。しかし、日本語による表現能力をより豊かにするためには「内容理解」と「表現練習」の両方が必要である。また視覚的に理解するだけにとどまらず「日本語を介した内容理解」の割合を増やすには、日頃から教員自身が「日本語」という言語に向き合い、生徒の理解度に応じてより平易な表現に言い換え、理解させる工夫が必要であると思われる。指導の際、母語話者である教員にとっては何気ない表現であっても、外国籍生徒にとっては「つまづき」の原因になることを齋藤ひろみ教授の講義で教示いただいた。我々教員は、そのような生徒の「つまづき」「困り感」を捉え、より平易な日本語表現にパラフレーズする技能も必要である。それこそまさしく「双方向のインタラクティブな授業」であるといえる。しかし、そのような「内容理解」でとどまっていたら外国籍生徒の日本語力は向上しない。平易に言い換えた表現やビジュアルエイドによって理解できた内容を、再度教科書の表現で理解させる方策を取らねばならない。本年度は「生徒の理解」を主眼に置いたのでこの点については十分に共通理解をもって進めることができなかった。次年度以降の課題としたい。

7. おわりに

外国籍生徒の日本語指導という分野、特に高校段階での実践報告事例があまり見つからず、何をすれば良いのか、具体的な解決策は先行研究の中で発見することは難しい。また特別なカリキュラム編成をせずに日本語指導を実施するのは困難であることから今回の研究に至った。日本語が苦手な外国籍だけを取り出し、相当数の教員を配当して「日本語ワークショップ」という形で様々な方策を講じることができた。外国籍生徒の日本語能力が急激に改善したとは言えないが、少なくとも「日本の高校で日本語を使って多くの人の前で発表をした」という経験は彼らにとって有益であったと思われる。それに加えて校内プレゼンテーションでのプレゼンテーション活動が少ない回数でより有効であったと感じられたのは、齋藤ひろみ先生が講演で取り上げていたレフ＝ヴィゴツキーが提唱した最近接発達領域（ZDP）が生徒間で有効に働いたからではないか、と感じている。今後も日本人・外国籍生徒が協同する活動を通じた教育活動の充実を図りたい。

8. 参考文献

- ・外国人児童の「教科と日本語シリーズ」小学校 JSL カリキュラム「解説」 佐藤郡衛、齋藤ひろみ、高木光太郎著 スリーエーネットワーク（2005）
- ・インプロをすべての教室へ 学びを革新する即興ゲーム・ガイド キャリー＝ロブマン、マシュー＝ルンドクウイスト著 新曜社（2016）